（別紙２）

審査の結果の要旨

氏名　上野美矢子

本論文は、米西戦争の勃発から比米戦争にかけてのフィリピン革命の「第２フェーズ」（1898－1902）における、香港、日本、スペインでの革命家の領外活動の検討を通じて、革命の崩壊の過程を跡付けたものである。

本論文は、序章、本論４章と終章から構成されている。序章では、研究史の検討と課題設定がなされている。そこでは、従来の研究が、フィリピン革命という「未完の革命」を神格化する傾向が強かったために史料の客観的検証が不足していたとし、一次資料の徹底的な検証を通じて革命の「崩壊過程」を描くことを、課題として設定している。

第１章では、1897 年 12 月スペインとの戦闘停止合意によって、アギナルドとその仲間が香港に到着してから、1903 年 7 月に香港委員会が解散するまでの、香港を中心とした領外活動の展開と崩壊の過程を、フィリピン革命の推移とあわせて検討している。それにより、アギナルド政府が領外革命家をコントロールすることができず、その状態が、領外革命家を制御不能にするという悪循環が起きていたことが明らかにされている。第 2 章では、日本に滞在したフィリピン革命家の関係を軸に、日本の参謀本部の革命軍への援助を検討し、比米戦争開始時には水面下で革命を軍事的にサポートしていた参謀本部が、戦争の途中からは、親日協力者養成とビジネス関係の構築にシフトしていったとする。第 3 章では、スペインで 1899 年から 1901 年にかけて刊行された革命新聞『フィリピナス・アンテ・エウロパ』の記事の分析が行われ、完全独立の立場からアメリカを強く糾弾したにも関わらず、アメリカとの差異を自分達の「スペイン性」に求めざるをえないなどの弱点を抱えていたとする。第 4 章では、在香港アメリカ総領事のワイルドマンの香港委員会との関係が分析され、当初、武器調達に協力していたワイルドマンが、1899 年以降は香港委員会を敵視するようになり、その武器調達を妨害した状況が描かれている。

本論文の第一の意義は、フィリピン革命の領外活動に関し、関連地域の一次資料を網羅的に活用することによって、先行研究が見落とし、あるいは誤った解釈を行っていたりした多くの点を説得的に明らかにし、その再考を求めたことである。第二に、フィリピン革命をナショナリズム論で整理せず、資料を丹念に読み込むことによって参加したアクターたちがどのような考えをもって行動していたのかを描くことに徹した結果、先行研究にはない「等身大の革命像」を提示していることも本論文のフィリピン革命史研究に対する大きな貢献である。

審査の過程では、本論文が実証主義の先にどのようなフィリピン革命像を提示しようとしているか明確でないなどの弱点も指摘されたが、これが本論文の積極的意義を否定するものではないことを確認し、全員一致で本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいと判定した。